

幼児の社会性の発達に関する研究（Ⅱ）

—— 社会的スキル訓練の効果 ——

鈴木 順 和

The Development of Social Nature in Preschool Children (II): Effects of Social Skills Training on Social Development

Toshikazu SUZUKI

Summary

This study was designed to investigate the effects of social skills training on children's social development. Two intermediate age classes of kindergarten, consisting of a training class and a non-training class, were compared. 26 children of the training class were coached in social skills by the class teacher: verbally initiating to a peer(a), responding to another child's initiation, offering support to peers, and so on. Social assessments by behavioral observation and personality test were administered after the training. There were no significant differences in total scores of social assessments consisting of eight items. There were, however, significant differences in sub-items; especially, the training class was superior to the non-training class in positive interaction with peer groups. Moreover, the training children showed significantly lower emotionality such as anxiety and neuroticism than the non-training children. The results suggest that teacher intervention and training enhance participation to peer groups and school environment, and that positive interaction with peer groups promotes mental stability.

最近は子どもの数が少なくなり、一人っ子が増えている。また、住居の様相も変化し、都市部だけでなく郡部においても高層住宅に住む子どもが増加している。こうしたことから、他の子どもとの関わりがなくなり、社会性の乏しい子どもがみられるようになったという指摘が近年なされてきている。しかし、このことは今の子どもたちが昔の子どもに比べて早くから幼稚園や保育園で集団生活を経験していることと考え合わせると、矛盾する現象であるともいえる。実際、鈴木（1991）

の研究においても、高木・坂本（1962）の研究との比較で、ほとんどの子どもが早くから集団生活を経験する現代っ子の方が社会性の高いことが指摘されている。

従来、友人関係の影響は児童期中期いわゆるギャング・エイジと言われる時代に大きくなるとされてきた。今でも確かに、児童期が社会性の発達にとって重要であり、児童期の仲間による拒否が現在および将来にわたって長期の影響をもたらすという。しかしながら、近年幼児期から既に友人関係が家庭内の親子関係と同様に社会性の発達に重要な役割を果たしていることが指摘されている（Hartup, 1983 ; Mize et al., 1985 ; 鈴木, 1991）。現代の子どもにとって、幼稚園や保育所といった集団生活の場は子どもの社会性を伸ばす重要な生活の場であり、そこでの生活経験は子どもの社会性の発達に大きな影響を与えると考えられる。それ故、こうした矛盾の原因の1つは、幼稚園等での生活経験が必ずしも子どもの社会性を十分に伸ばしきれていないことにあると思われる。

ところで、子どもの社会性を捉えるときに社会的スキル（Social Skill）という概念でみていくことがある（Rinn & Markle, 1979）。これは社会性が「グローバルなパーソナリティ特性ではなく、学習性の行動であるという意味をこめてあえてスキルという言葉が用いられる」（Michelson et al., 1983）からである。Mize & Ladd（1990）は、就学前の子どもにとって社会的スキルの訓練を受けることが必要である、と指摘している。その理由の1つとして、小学校に上がる以前の子どもにとっても仲間が子どもの発達に重要な役割を果たし（Hartup, 1983 ; Mize et al., 1985）、しかも就学前児の社会的能力や仲間による受容にみられる個人差が小学校入学後も安定して残ることを挙げている（Ladd & Price, 1987 ; Waldrop & Halverson, 1975）。2つ目として、就学前児の仲間集団はギャング・エイジの時期の集団と違って他のメンバーの仲間への受容が得られやすく、集団内の子どもの地位を変容させることがより年長の子どもの達に比べて成功しやすいことを挙げている。3番目に、就学前では学業成績よりも社会性の発達を重視しているために、幼稚園等での生活経験そのものが社会的スキル訓練を進めやすくしてくれる点を挙げている。

そこで矛盾の解明のため、Mize & Ladd（1990）の指摘に従い、就学前の子どもに社会的スキル訓練（Social Skills Training）を施し、子どもの社会性が伸びるかどうかが調べることにした。ただ、今までは児童期の子どもを対象に研究がなされており、幼児における社会的スキル訓練の研究は少なく、その効果的な訓練方法の開発も進んでいないため、幼児を対象にした数少ない研究の1つである佐藤ら（1993a, b）の訓練法を参考に行った。幼稚園を対象に選び、教師の園児に対する社会的援助（社会的スキル訓練）によって子どもの社会性がどのように変化するかを調べた。その結果、教師の社会的援助によって子どもの社会性が発達することが示された（鈴木ら, 1993 ; 鈴木, 1994）。

これは、社会的スキル訓練を通して子どもの社会性が伸びる可能性を示唆したものと考えられる。しかしながら、それは単独のクラスでの研究であり、加齢に伴う発達的变化か訓練の効果か明瞭ではない。そこで、本研究では訓練を受けた子どもと受けなかった子どもとを比較することで、社会的スキル訓練の効果をより詳細に調べることにした。

方 法

被験児 宮崎郡清武町にある本学附属清武みどり幼稚園の年中組の2クラス（男児27名，女児27名）の54名の園児である。1クラス（26名）に対して社会的スキル訓練を行い，他の1クラス（28名）に対しては従来の保育を行ってもらった。

調査期間 1992年9月に行った。

訓練方法

以下の訓練を1992年4月から7月にかけて行った。

- ① 特に引っ込み思案な子どもに対して，保育者が積極的に援助を行った。例えば，「仲間に入れて」「一緒に遊ぼう」など，他の園児に受け入れられるためにはまず自分から言葉をかけるようにといった助言を行った。その時保育者は側で見守り，本人が難しいようだったら，一緒に言葉をかけながら繰り返し援助した。
- ② 全体に対しては，友達と仲良くするにはどうしたらよいか，「遊ぼう」と言われたらどうしてあげればよいかなどの質問をして，クラスの子ども全員で話し合ったり，ペープサートや紙芝居などを用いて子どもたち自身の問題に置き換えてみたりしながら，受け入れる方法を考えさせたり他の園児との接触の方法を話したりした。

測定方法

① 社会的行動評定

本行動評定はホップスら（Hops & Greenwood, 1988）の教師用社会的相互作用評定尺度（Social Interaction Rating Scale for teachers）を参考に作成された。8項目から成る調査表で，各項目1点から7点までの7ポイントで評定するようになっていた（鈴木，1993を参照）。各項目とも4点が平均的な子どもの位置するところで，1点に近いほど社会的相互作用が少なく，7点に近いほど社会的相互作用が多いことを示す。この社会的行動評定調査表をクラス内（担任評定）と異年齢保育中（ドリーミング・デー）で実施した。クラスでは担任が評定し，異年齢保育の中ではその子どもの保育を担当した教師が評定した。

② 性格検査

幼児・児童性格診断検査（高木・坂本，1962）を用いて，担任を通して検査用紙の配布・回収を行い母親に記入してもらった。なお本性格検査は，1）顕示性，2）神経質，3）不安傾向，4）自制力，5）依存性，6）退行性，7）攻撃性，8）社会性，9）家庭適応，10）学校への適応の10項目の性格特性を測定すると同時に，体質傾向（体質的過敏性）も併せて診断するものである。

結 果

各群毎の社会的行動評定（ドリーミング・デー）と性格検査の結果がTable 1に示されている。なお，クラス担任の社会的行動評定については，訓練群の男児2名が調査時に欠席していたため合計52名の園児が分析の対象となっている。

Table 1 社会的スキル訓練群と非訓練群の測定項目の平均値

測定項目	性格検査				測定項目	社会的行動評価			
	男児		女児			男児		女児	
	訓練群	非訓練群	訓練群	非訓練群		訓練群	非訓練群	訓練群	非訓練群
体質的安定	1.54	3.07	1.23	1.79	総合平均	3.51	3.60	3.76	3.80
個人的安定	16.00	23.36	16.31	18.43	項目 1	3.62	3.43	3.69	3.86
社会的安定	5.15	6.00	4.15	5.21	項目 2	3.38	3.64	3.54	3.79
顕示性	3.23	3.86	2.23	2.50	項目 3	3.54	3.86	3.85	3.93
神経質	1.62	2.86	2.00	2.64	項目 4	4.08	3.86	5.77	4.64
不安	1.23	3.07	1.54	2.43	項目 5	3.00	3.36	2.38	3.14
自制力	2.23	3.71	1.46	1.93	項目 6	3.15	3.36	2.31	3.50
依存性	2.92	4.57	3.15	3.36	項目 7	3.69	3.79	4.54	3.71
退行	2.69	4.21	3.31	3.21	項目 8	3.62	3.50	4.00	3.86
攻撃	2.08	4.07	2.62	2.36					
社会性	1.23	1.86	1.23	2.21					
家庭	2.23	3.07	2.00	2.14					
学校	1.69	1.07	0.92	0.86					

社会的行動評定

1) クラス担任の社会的行動評定

社会的行動評定の結果は Fig. 1 に示されている。クラス内について 2 要因（訓練×性）の分散分析を行ったところ、総合得点ではいずれも有意差がなかった（訓練： $F=0.69$, $df=1/48$, ns；性： $F=0.02$, $df=1/48$, ns）。しかしながら、下位項目については項目 4 と 6 で訓練の主効果がみられた（順に、 $F=5.52$, $df=1/48$, $p<.05$ ； $F=5.39$, $df=1/48$, $p<.05$ ）。項目 4 では訓練群の得点が高く、

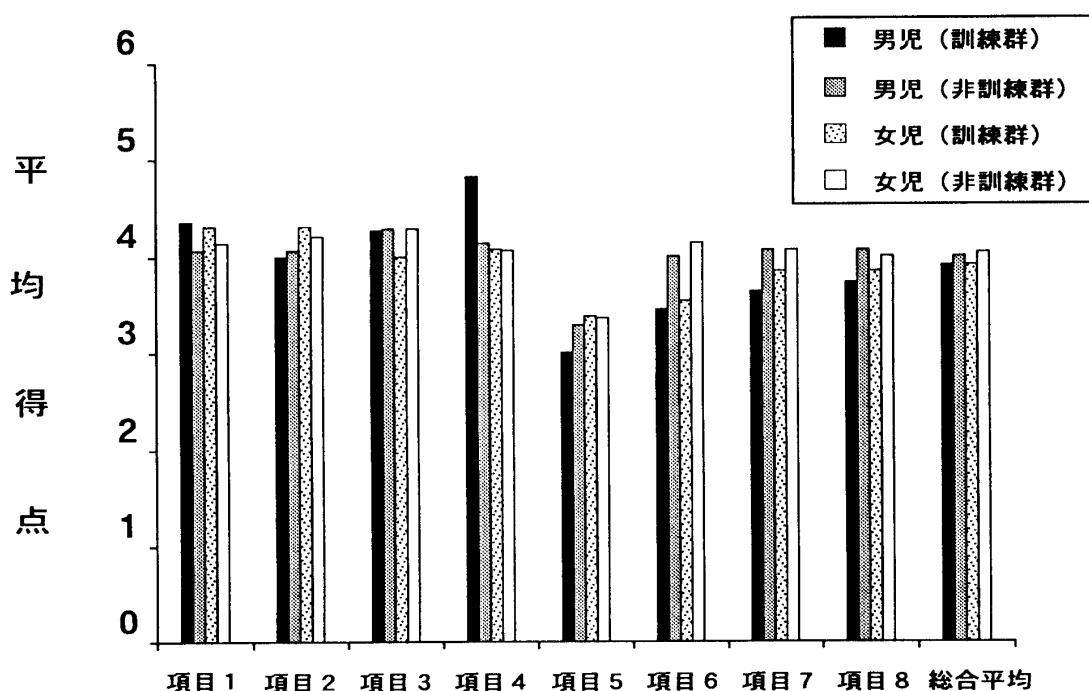


Fig. 1 クラス担任による社会的行動評定の結果である。平均得点の高いほど社会性が高いことを示す。

項目6では非訓練群の得点が高かった。また、項目4では性の主効果と交互作用がみられた(順に、 $F=7.60$, $df=1/48$, $p<.01$; $F=5.20$, $df=1/48$, $p<.05$)。項目4では男児の方が得点が高かった。なお、項目4で交互作用がみられたので単純効果の検定を行った。その結果、男児において訓練の効果のみがみられ($F=10.70$, $df=1/48$, $p<.01$)、訓練群で性差がみられた($F=12.66$, $df=1/48$, $p<.01$)。以上のように、全体的な行動面で明かな社会性の差異はみられなかったが、訓練群の子どもの方が積極的にクラスの遊びに参加することが示された。特に、それは男児において著しかった。

2) ドリーミング・デーの社会的行動評定

社会的行動評定の結果は Fig. 2 に示されている。同様の2要因分散分析を行ったところ、総合得点においては訓練の主効果はみられなかった($F=0.26$, $df=1/50$, ns)。ここでも、両群間において全体的な行動面で明かな社会性の差異はみられなかった。しかしながら、下位項目についてみると項目4・5・6・7で訓練の主効果がみられた(順に、 $F=6.95$, $df=1/50$, $p<.05$; $F=5.88$, $df=1/50$, $p<.05$; $F=6.76$, $df=1/50$, $p<.05$; $F=6.86$, $df=1/50$, $p<.05$)。項目4と項目7では訓練群の得点が高く、項目5と項目6では非訓練群の得点が高かった。訓練群ではリーダーシップを取ったり、長い会話をするといった面が顕著ではなかったが、積極的にゲームに参加したり、グループへの接近が盛んなことが示された。

性差については総合得点で有意な傾向がみられた($F=3.15$, $df=1/50$, $p<.10$)。また、下位項目については項目4と項目7で性の主効果がみられ(順に、 $F=23.27$, $df=1/50$, $p<.001$; $F=7.63$, $df=1/50$, $p<.01$)、項目5と項目8で性に有意な傾向がみられた(順に、 $F=3.31$, $F=3.25$, 共に $df=1/50$, $p<.10$)。項目5でのみ男児の方が得点の高い傾向があったが、それ以外の項目4、項目7、項目8および総合得点では女児の方が男児より得点が高かった。リーダーシップをとる点を除いては、一般に女児の方が社会性の優れていることを示した。

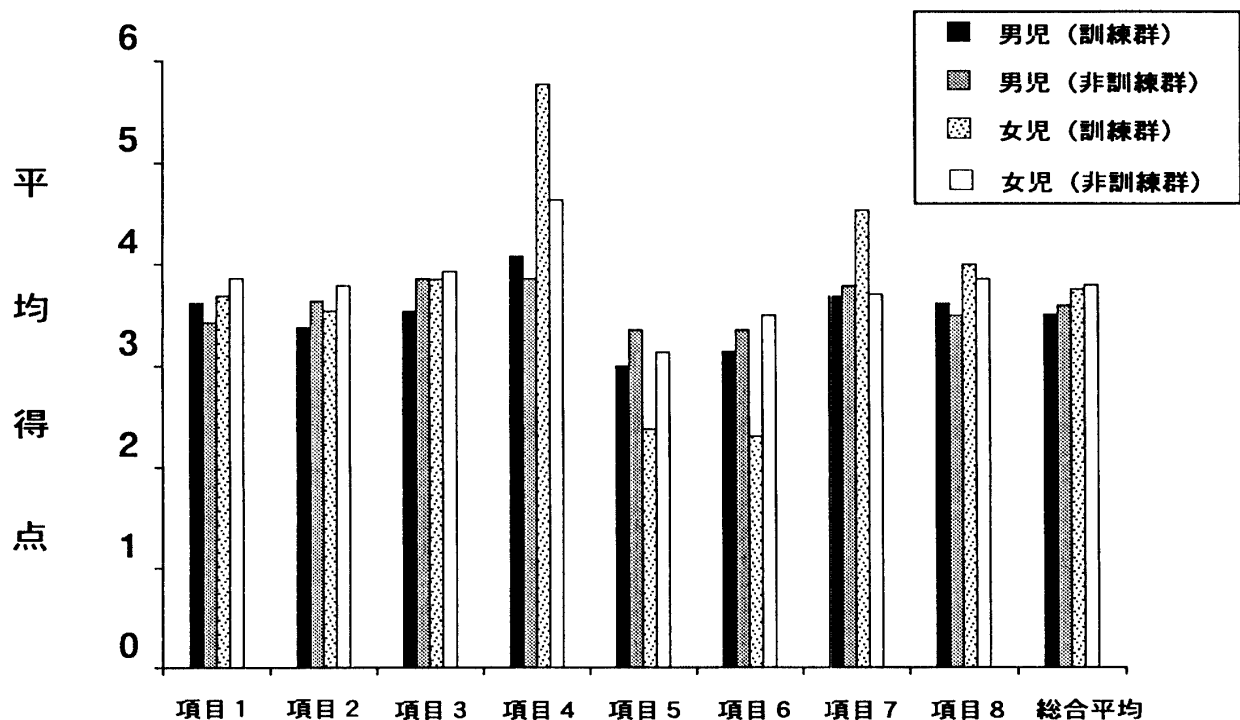


Fig. 2 異年齢保育中の社会的行動評定の結果である。平均得点の高いほど社会性が高いことを示す。

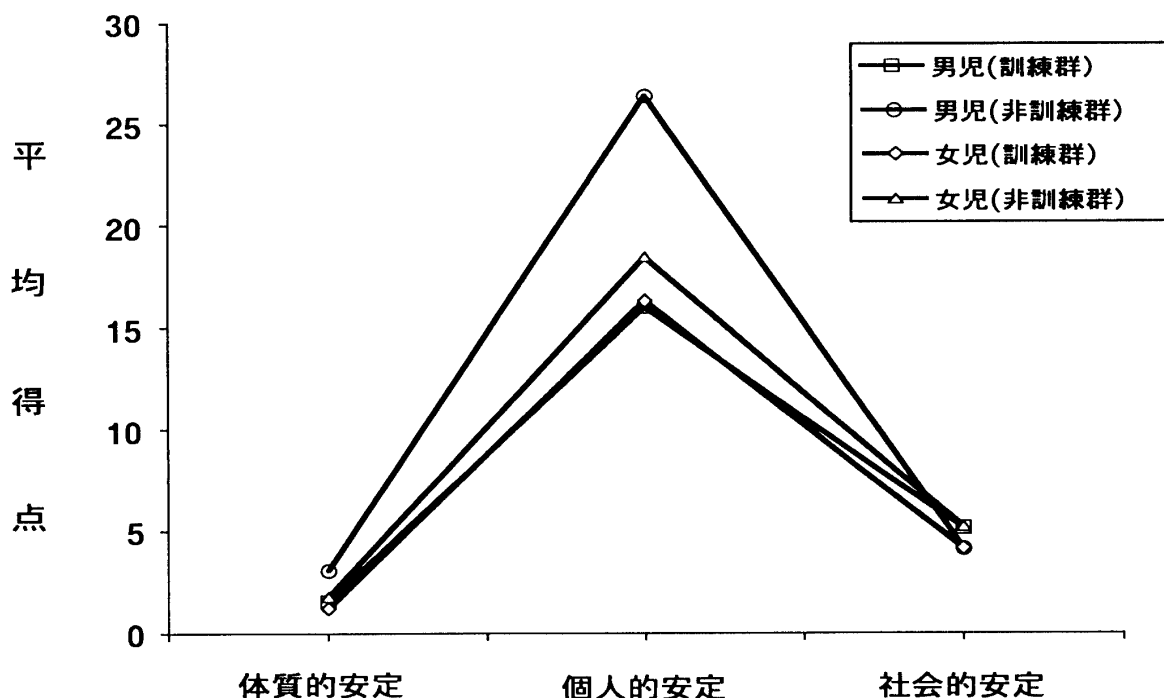


Fig. 3 各群の性格検査における総合的特性の結果である。平均得点の低いほど安定していることを示す。

性格検査

1) 総合的特性

総合的特性とは体質的安定・個人的安定・社会的安定の3つである。なお、体質的安定は体質傾向の粗点で、個人的安定は顕示性から攻撃性までの7項目の粗点の合計で、社会的安定は社会性から学校への適応までの3項目の粗点を合計したものである。総合的特性の結果はFig.3に示されているが、同様の2要因分散分析を行ったところ、体質的安定と個人的安定で訓練の主効果がみられた(順に、 $F=5.64$, $df=1/50$, $p<.05$; $F=5.42$, $df=1/50$, $p<.05$)。また、体質的安定では性差に有意な傾向がみられた($F=3.26$, $df=1/50$, $p<.10$)。社会的安定についてはいずれも有意差がなかった(訓練: $F=0.93$, $df=1/50$, ns; 性: $F=0.82$, $df=1/50$, ns)。訓練群の方が体質的安定も個人的安定も得点が低く、身体的過敏性が低く、精神的に安定していることが示された。また、体質的安定については女児の方が得点が低く、身体的過敏性が低い傾向にあることが示された。社会性については両群に差がみられず、性差もなかった。

2) 各性格特性

総合的特性において有意でないし有意な傾向がみられたので、次に各性格特性毎に同様の2要因分散分析を行った。その結果、不安において訓練の主効果がみられ($F=11.02$, $df=1/50$, $p<.01$)、神経質において有意な傾向があった($F=3.38$, $df=1/50$, $p<.10$)。また、自制力において性の主効果がみられ($F=4.62$, $df=1/50$, $p<.05$)、顕示性で性に有意な傾向があった($F=2.84$, $df=1/50$, $p<.10$)。訓練群は不安が少なく、神経質傾向の低いことが示された。また、女児の方が自己顕示性が低く、自制力の高いことが示された。社会的安定の下位項目においてはいずれも有意差がなく、下位特性でもはっきりとした社会性の差異がみられなかった。

考 察

本研究では、スキル訓練に伴う社会性の変化と性格の変化から訓練効果が調べられた。仲間関係の変化や社会性の変化は行動評定と性格検査によって測定された。行動評定の分析の結果、クラス担任の総合評定では明らかな社会的スキル訓練の効果はみられなかった。しかし、下位項目では訓練群と非訓練群に差異がみられ、訓練群でターゲットスキルの1つである「遊びへの参加」が積極的になっていることが示された。それは特に男児において顕著であった。ドリーミング・デー（異年齢保育場面）でも、担当者の総合評定において明らかな訓練効果がみられなかった。しかしながら、ここでも評定項目別では差異がみられ、訓練群で積極的に遊びに参加したり、グループへの接近の盛んなことが示された。なお、異年齢場面では一般に女児の方が男児より社会性の優れていることが示された。以上のように、全体的な行動面に関する限りははっきりとした訓練効果がみられていないが、ターゲットスキルの1つである「集団活動への参加」に積極的になるという効果はみられているものと思われる。それが男児で特に顕著であったのは、本幼稚園児では本来女児の方が社会性に優れていたため、より効果が著しかったものと思われる。

性格面での変化をみるために幼児・児童性格診断検査を行った。その結果、訓練群の方が身体的過敏性は低く、情緒は安定していることが示されたが、社会面には差がなかった。特に、訓練を受けた子どもは身体的過敏性や不安が少なく、神経質傾向の低いことが示された。また、性格面で性差がみられ、女児はわがままや自己顕示性が低く、感情の統制（自制力）の高いことが示された。以上のように、本検査でも訓練に伴う明らかな社会性の発達はみられなかった。しかしながら、訓練を受けた子どもは情緒面が安定し精神発達が良好なことが示されており、集団活動への参加が性格面にもプラスの影響を与えていることが窺える。ところで、女児の社会性が高かったのは、性格面での性差によるものと思われる。すなわち、女児の自己顕示性の低さや自制力の高いことが、対人関係（社会的相互作用）に有利に働いたためと考えられる。

本研究の結果は、前回の結果（鈴木ら、1993；鈴木、1994）と異なり明らかな訓練効果がみられなかった。とは言え、下位項目では両群間に差がみられ、訓練群では集団への積極的な働きかけが優れていることが示されており、援助方向への行動的变化が生じている可能性を示唆している。ところで、明確な訓練効果のみられなかった理由の1つとして、比較方法の問題がある。前回の結果は縦断的研究で、加齢に伴う変化と訓練に伴う変化が混在していたのに対して、今回は訓練の有無による変化だけであった。今回の結果から判断すると、この時期の幼児にとって、社会性の発達は訓練より加齢に伴う変化の方が大きいことが考えられる。2番目としては、調査時期の問題がある。今回の研究は夏休み後の比較であったため、夏休み前の訓練効果が十分に持続しなかったことが考えられる。3番目としては、行動評価の方法の問題がある。2つの行動評定の結果にかなりの相違がみられており、教員間で十分に評定方法が熟知・統一されていず、はっきりとした行動評定の差異が生じなかったことが考えられる。それ故、上述した問題を今後解決し、より詳細に社会的スキル訓練の効果について調べていく必要があると思われる。

付 記

本研究に御協力頂いた本学附属清武みどり幼稚園の先生方並びに園児の皆さんに深く感謝いたします。また、本研究にあたり幼児の訓練指導に貴重な助言を頂きました宮崎大学教育学部佐藤正二助教授にも厚く御礼を申しあげます。

引 用 文 献

- Hartup, W. W. 1983 The peer system. In E. M. Hetherington (Ed.) *Handbook of child psychology: Vol. 4. Socialization, personality, and social development* (4th ed.). New York: John Wiley.
- Hops, H. & Greenwood, C. R. 1988 Social skill deficits. In E. J. Mash & L. G. Terdal (Eds.) *Behavioral assessment of childhood disorders* (2nd ed.). New York: Guilford Press.
- Ladd, G. W. & Price, J. M. 1987 Predicting children's social and school adjustment following the transition from preschool to kindergarten. *Child Development*, **58**, 1168-1189.
- Michelson, L., Sugai, D. P., Wood, R. P., & Kazdin, A. E. 1983 *Social skills assessment and training with children*. New York: Plenum Press. 高山巖・佐藤正二・佐藤容子・園田順一(訳) 1987 子どもの対人行動: 社会的スキル訓練の実際 岩崎学術出版
- Mize, J. & Ladd, G. W. 1990 Toward the development of successful social skills training for preschool children. In S. R. Asher & J. D. Coie (Eds.) *Peer rejection in childhood*. New York: Cambridge University Press.
- Mize, J., Ladd, G. W., & Price, J. M. 1985 Promoting positive peer relations with young children: Rationales and strategies. *Child Care Quarterly*, **14**, 221-237.
- Rinn, R. C. & Markle, A. 1979 Modification of social skill deficits in children. In A. S. Bellack & M. Hersen (Eds.) *Research and practice in social skills training*. New York: Plenum Press.
- 佐藤正二・佐藤容子・高山巖 1993a 引っ込み思案幼児の社会的スキル訓練—社会的孤立行動の修正— 行動療法研究 **19** (1), 1-12.
- 佐藤容子・佐藤正二・高山巖 1993b 攻撃的な幼児に対する社会的スキル訓練—コーチング法の使用と訓練の般化性— 行動療法研究 **19** (1), 13-27.
- 鈴木順和 1991 幼児における運動能力と性格の関連 宮崎女子短期大学紀要 **17**, 137-148.
- 鈴木順和・脇孝子・米倉春良 1993 幼児の社会性の発達に関する研究(Ⅰ)—社会的スキル訓練を通して— 宮崎女子短期大学紀要 **19**, 123-131.
- 鈴木順和 1994 幼児の社会性の発達に関する研究—社会的スキル訓練を通して— 日本教育心理学会第36回総会発表論文集, 83.
- 高木俊一郎・坂本竜生 1962 幼児・児童性格診断検査の手引 金子書房
- Waldrop, M. F. & Halverson, C. F. 1975 Intensive and extensive peer behavior: Longitudinal and cross-sectional analyses. *Child Development*, **46**, 19-26.

[1995年12月10日受理]